



昭和40年頃早稲田界隈

LAZY YOSHI

目が覚めると、まな板の音がきこえる。母の朝食の準備の音だ。「パーファー」路地から、豆腐屋さんのラッパの音が聞こえる。カーボーイの豆腐やさんだ。父は、テンガロンハットを冠った、この豆腐屋さんを、そう呼んでいた。新宿とは言え、昭和40頃の早稲田は、そんな町だった。

スーパーが買い物の主流になり、パックの豆腐ばかりになったのは、いつの頃からだろう。私が子供の頃は、鍋を片手に、豆腐屋さんにお使いに行き、こう言った物だ。「お豆腐一丁、お汁に切ってください。」すると、小父さんが、風呂桶の様な水槽から、一丁掬い上げ、掌に載せて、銅製の薄い包丁で、賽の目に切って鍋に入れてくれる。子供の私には、何故、手まで切れないのかが不思議だった。

売り声と言え、浅蜷売りも忘れられない。「アサリ～、シジミ。アサリ～、シジミ。」この売り声が、その頃の私には、「アッサリ～、シンジメエ。」にしか聞こえない。「浅蜷、蜆。」と知ったのは、もう少し大人になってからの事であった。

その頃の路地は、物売りだけでなく、人々の往来が賑やかだった。新聞配達の学生さん、井戸端会議の近所の小母さん、遊ぶ子供、そこは生活の場であり、社交の場でもあった。そんな緩やかな風景を懐かしく感じるのは、齢のせいなのだろうか、それとも、無くなってしまった物への郷愁なのだろうか。

子供の頃を思い出しながら、早稲田の町を散策して見ると、無くなっていった物の多さに驚く。それは、この町だけに限った事ではないであろう。しかし、私の思い出は、この町にしか無い。こんな気持ちになったのは、名古屋で暮らす様になった為かも知れない。生まれた土地を離れて、初めて、その土地に憧憬を抱くのかも知れない。

## 板の間

---

私の家庭は、祖父、叔父、叔母も同居している大家族だった。板の間に大きな卓袱台があり、全員揃って、そこで食事を摂るのだった。当時としても比較的保守的な家庭で、食事中に、話をしたり、笑ったりすると叱られるのが常だった。一家団欒の食事と言うよりは、食事と言う儀式だった。

小学生の私は、足を崩す事は勿論、胡座をかく事も許されず、正座での食事だった。毎日3度の正座で、私の踝の辺りは、タコになっていた事を思い出す。正座での食事も、冬になると一時的に解放された。

板の間の板が部分的に外され、掘り炬燵になる事が、その理由だ。その頃は、まだ、赤外線電気コタツではなく、練炭だった様に思う。炬燵に火が入るのは、夕食の時だけだった。夕方になると、七輪に練炭を入れ火を熾す。その七輪ごと、掘り炬燵の底に置かれた。今考えると、随分と野蛮な暖房だと思うが、それが唯一の暖房だった様な気がする。

練炭と言えば、炭屋さんが思い浮かんで来る。我が家の裏の路地に、炭屋さんがあった。燃料屋さんではなく、炭や練炭、豆炭という炭類だけを扱っているという、当時でも古くさい店だった。その隣は、鯉節屋さんの倉庫だった。重い鯉節を運ぶ為に、倉庫の2階には、滑車が付いていたが、私には、その使い道が、分からなかった。倉庫の近くに行くと、鯉節の香りがした事が懐かしい。

## 氷屋さん

---

物心ついた頃には、我が家にも、冷蔵庫があった。電気冷蔵庫ではなく、ガス冷蔵庫だ。ガスだから、小さいながらも、火が点いていた。火が点いているのに、冷える事が、不思議だった。

当時の冷蔵庫は、現在のそれよりも、格段に小さな物だ。当然、冷凍庫等無く、氷も製氷皿を入れて、凍るまで長い時間を必要とした。現在の水を入れておけば、大量の氷が自動的に出来上がる環境とは、雲泥の差を感じずにはいられない。本当に、氷には、困らなくなったものだ。

夏休みになると、小学校で、スイカ割り大会が開催された。スイカの代わりに、ドッジボールを使い、見事ボールを叩けば、商品として、本当の西瓜が丸々貰える。私は、その大会で、西瓜を獲得し、家まで、フウフウ言いながら持ち帰った。

今なら、冷蔵庫で冷やすのだろうが、そこには、そんなスペースは無い。こんな時は、氷屋さんへ、氷を買いに行ったものだ。「氷を一貫下さい。」そう言って、ティッシュ箱2つ程の大きさの氷を注文するのだった。

子供にとって、氷屋さんは、楽しい場所だ。大きな冷凍室から、大きな氷の固まりが、運び出され、その塊は、大きな丸鋸で、一貫目の大きさに、切断される。ビューンと丸鋸が回りだし、シャーと氷が切り出される様子を、興味深く眺める。ワクワクする光景だった。

またもや、フウフウ言いながら、氷を家に持ち帰る。西瓜は、持ち帰った氷と共に、水の入ったバケツに、放り込まれた。暫く西瓜の冷えるのを待つ。待ち切れずに、外へ飛び出した。

「ただいま！」遊びから帰った、私は、汗まみれだ。汗を、シャツの袖で拭い、叱られながら、冷えたばかりの西瓜で喉を潤した。あの頃の西瓜の味は、今はもう味わえない様な気がする。西瓜を食べるには、エアコンは邪魔な存在なのだ。

## カラーテレビ

---

私は、まだ珍しかったカラーテレビを、子供の頃から見ていた。残念ながら、我が家に、カラーテレビがあった訳ではなく、近所の喫茶店にカラーテレビが、置かれていたのだ。従って正確に書くと、見ていたのではなく、覗いていたのだ。

その喫茶店は、カラーテレビが設置されている事で、繁盛していた様な気がする。カラーテレビだけで、ウリになった事が、今思えば面白い。少し不便だが、良き時代だったのだろう。

当時を振り返ると、カラー放送は、大相撲の中継位だった様な気がする。その為か、私の記憶には、お相撲さんの肌の色だけが印象としてあるだけだ。カラーテレビは、あっても、カラー放送は、ほんの一部の番組だった事が、今では奇異に感じられる。新聞のテレビ番も、始めは、カラー放送に、カラーの印がつけられていた。カラー番組が中心になると、白黒の番組に印がついた。そして、いつの間にか、そんな印は無くなった。

我が家にも、白黒ではあるが、テレビがあった。お気に入りの番組は、『鉄腕アトム』『琴姫七変化』『月光仮面』だった。子供番組ではあっても、大人も一緒に楽しみにしていた。まだまだ、テレビの無い家庭もあり、一家に一台あれば幸せだったのだから、子供番組と言え、家族で見る事を前提とした番組が、作られていたのかも知れない。

いつの間にか、『鉄人28号』が始まっていた。子供番組ではあるが、放送時間は、夜の9時からだったように記憶している。8時が、就寝の時間だった、私は、特別な日にしか見ることが出来なかった。当時、8時就寝が、クラスの大半だった様に思う。昔の子供は、早寝だったのだ。

## 風呂敷

---

子供達は皆、風呂敷をマントにして、スーパーマンになり切っていた。首に、風呂敷を結び、マント代わりにして、単に走り回るだけだが、気分は完全にスーパーマンだった。手を前に伸ばして走れば、空を飛ぶ事だって出来る。完璧な変身だった。当時は、キャラクター物の変身グッズ等無かった。子供達は、身の回りの物を使って工夫をし、時にその工夫の為に、親から叱られた。

或る日、スーパーマン、クラーク・ケント役の俳優の自殺が、報道された。仲の良い従兄弟が、ガッカリしていた事を思い出す。その頃、スーパーマンは、子供達のヒーローを越え、社会的なブームだった。WEBで、検索してみると、自殺説と共にそれを否定する説も見つかり、興味深い。

当時の子供達は、スーパーマンに限らず、アメリカのドラマに囲まれて生きていた。印象深い物を挙げると、『怪傑ゾロ』『ララミー牧場』『ライフルマン』『奥様は魔女』『わんぱくフリッパー』・・・と、切りが無い。まだまだ、自前の番組を作るのが困難だったのだろう。そんな中で、アメリカに影響を受けない訳は無く、大きな冷蔵庫、大きな牛乳瓶に、憧れるのは自然な流れであろう。

マント繋がり、怪傑ゾロが思い浮かぶが、こちらは、少しマニアックな気がする。それは、変身するには、マスクも必要だったからかも知れない。マントだけでは、変身出来なかった事が、スーパーマン程には、子供達に受けなかった理由の様に思う。

私は、クリスマスパーティの紙のマスクを手に入れ、ゾロに変身した。その喜びも束の間だった。弟と、そのマスクの奪い合いとなり、大喧嘩となった。ゾロの様な洗練された決闘とは無縁だったのだ。そして、無情にも、その原因のマスクは、母によって葬り去られた。一人っ子が、羨ましく思われる瞬間だった。

『一六』と言うのは、縁日の事だった。夏になると、一の付く日に、大隈講堂から、都電の早稲田駅までの路地に、屋台がならんだ。昔は、六の付く日も縁日だったらしい。だから、『一六』なのだったが、私が、物心ついた頃には、六の縁日は、無くなっていた。一の付く日は、縁日の筈だが、三十一日は、縁日が無い事が、不満だった。「何で三十一日は、縁日が無いの？」と、母に尋ねた事を思い出す。「一日が、縁日だから！」それが、答えだった。大人には、当然の事であっても。子供には納得の出来ない事だと思った。

縁日は、楽しい日でもあり、少し悲しい日でもあった。買い食いが許されていない私達兄弟は、綿飴や、水飴を舐めながら歩く友達の姿を、羨ましそうに眺めた。「卑しい顔をしない！」父から窘められる事が、常だった。何故食べられないのだろうか？と、思うが、父の言葉は、絶対だった。

それでも、古本のマンガや、水風船を手に入れば、そんな不満もどこかへ消えて行った。単純だった。縁日は、何かを買って貰える事よりも、夜に外に出れると言う例外の日である事が、私をワクワクさせたのかも知れない。夕暮れの中に、煌めく屋台の灯。いつもは厳しい父と、一緒に、散歩出来る事が嬉しかっただろう。

十日に一回の周期で、縁日。今思えば、頻繁に、縁日だ。そしてそこに並ぶ夜店も、いつも同じ顔ぶれだ。それでも、覗かなければ気が済まない。娯楽が、まだまだ、限られていたのだろう。

雨の日は、縁日は中止。雨の日が、恨めしかったのは、言うまでも無い。ガッカリする私達兄弟とは、裏腹に、両親は、ホッとしていたのかも知れない。私も、漸く、そんな事を分かる歳になった様だ。

## オバQ

---

夏になると、子供達の遊び着は、半袖の肌着やランニングだった。その頃のTシャツは、市民権を持ってはいなかった。子供だけでなく、唐木職人の祖父も父も、また、同様だった。当時の早稲田は、製本の町だった。そのためか、私の周りの大人達は、汗まみれの肌着で仕事をしていた。

ある夏、オバQのTシャツが、お菓子会社の景品となった。たしか、乳酸飲料の景品だった様に思う。一家を挙げて、応募するのだが、その望みのTシャツは、手に入らなかった。そこで、父は一計を案じ、「シャツを持って来な。」と、一言。シャツを持って戻ると、父の手には、黒のマジックが握られていた。「俺が、描いてやる！」二人分の『オバQ』シャツが、完成したのだった。しかし、本物のとは違い、黒一色。少し悲しいが、それでも、嬉しかった様な気がする。

今なら、著作権の侵害だろう。良きにつけ、悪きにつけ、大らかな時代だったのだ。

遊び着は、肌着であったが、学校に行く時は、余所行きを着せられた。そして、学校から帰ると、普段着に着替える事が、我が家の掟であった。そして、学校の始業式、終業式には、ブレザーが準備されていた。私には、それを着るのが、恥ずかしかった。どこか気取っている気がして、友達から囃し立てられる恐怖を想像した。学校に行き、何人かのブレザー姿を見つけると、ホッとしたものだ。

今の私は、家の中でも、外出する時でも、同じ格好をしている。遅まきながら、子供時代への反発なのかも知れない。「年相応の格好をしなさい。」未だに母は小言を言う。時代は変わったんだよ。私は、思う。しかし、いつまでも、母の感覚と言うものは、変わらないものらしい。

## 風呂焚き

---

材木を扱う我が家は、風呂を薪で焚いていた。ガス風呂が普及し、薪で風呂を沸かしている家は、当時としても、既に珍しかった。風呂を沸かすのは、私の役目だった。先ず、燃え易い新聞紙や鉋屑を一番下に敷き、その上に、細い薪を置き、最後に太めの薪を乗せ、マッチで点火する。火が熾れば、後は、適当に薪を焼べるといふ、単純な仕事なのだが、それなりに、工夫が必要だった。空気の道を確認しなければ、不完全燃焼のため、風呂場中に、白い煙が充満した。面倒だとばかりに、大きな薪を入れると、その憂き目にあう。子供ながらに、横着すれば、それなりの報いがある事を、日常的に体験していた様だ。

我が家では、代々風呂焚きは、子供の仕事だったようだ。叔父さん達が、その思い出を面白そうに話していた事を思い出す。せっかちな祖父が、「まだ、風呂は沸かないのか！」と、引っ切りなしに催促する。始めの中は、「もう少し。」と、答えていた叔父も、「まだ、沸かないのか！」祖父の言葉に、とうとう、「入れるよ。」と、一言を放った。待ってましたとばかりに、風呂に飛び込んだ祖父は、驚いた。「沸いて無いじゃないか！」叔父は、「入れるとは言ったけど、沸いているとは、言っていないよ。」せっかちな事を反省したのか、祖父からのお咎めは、無かったらしい。まるで落語だ。

子供は、火に興味を持つのが倣い。しかし、毎日の様に、風呂焚きをしていれば、それは、義務でしかない。大人になった今の私が、火遊びに、嘖と興味がわかないのは、この風呂焚きの為かも知れない。

## 都電

---

現在も、都電荒川線は健在で都電の早稲田駅はある。私の子供の頃は、早稲田の駅は、現在の都営アパートの場所にあり、車庫になっていた。そこには、ターンテーブルがあった様な気がするが、記憶は定かではない。現存の三ノ輪までの路線だけでなく、上野や浅草に行くのにも都電を利用していた様に思う。現在のバスの路線は、大方都電の路線だったと思われる。

当時は、都電と一緒に、トロリーバスという、大型のパンタグラフが付いたバスも走っていた。多分、新宿のあたりを通っていた印象があるのだが、これも明確ではない。都電には乗っていたが、トロリーバスには、乗った事が無く、見かけるだけということが、印象の薄い理由かも知れない。

路面を走っていた、都電もトロリーバスも、やがて車の増加に伴って、その場所を追われて行った。都電荒川線が残っているのは、車の道路とは別に、その軌道が確保されている為なのだろう。一般の道路に、出るのは、池袋、飛鳥山ぐらいの様に記憶している。

現在の都電は、ワンマンカーであるが、当時の都電は、小さな黒い皮のバッグを首からかけた、車掌さんも同乗していた。乗る時には、車掌さんから、切符を買い、降りる時には、車掌さんに、切符を渡した。車掌さんには、もう一つ大事な仕事があった。降車客のいない事を確認して、運転手さんに、合図を送る。紐を引いて、チンチンとベルを鳴らすのだ。私達は、都電とは言わずに、チンチン電車と呼んでいた。

ただチンチンと、鳴らすだけの事なのだが、この音を殊の外楽しみにしていたものだ。ただ、このチンチンの音も、終点では鳴らされなかった。乗客皆が、降りるから、合図は必要ないのだった。帰り道は、いつも終点で、降りる私には、何となく物足りないものを感じるのだった。

## 漆

---

唐木には、漆が付き物だ。唐木の仕上げには、漆を使う。漆は、気触れるらしいが、幼い頃から身近にある為か、私には無縁だった。漆は、湿気が無いと乾燥しない。乾燥の行程が始めると、夏でも閉め切りの蒸し暑い部屋が準備され、冬にはそこに、薬缶の乗ったストーブが追加された。そして定期的に、霧を吹き、湿度を保つのがだった。

祖父と都電に乗って、浅草まで漆買いのお供をした事が、懐かしい。「きじょうめ」と言って注文していた様な気がしたが、調べてみると、「生正味」が正しいらしい。注文を受けた店の小父さんは、樽から漆を、ヘラを使い器用に鉛のチューブに詰めてくれる。ドロドロの漆は、練った白胡麻の様な色をしていた。一滴も零さずに、チューブへ流れ込む光景に、目をパチクリさせたものだ。

祖父のお使いのお供は、私にとって、正に夢の様な時間だった。それは、買い物のご馳走が待っているからだ。お店に入り、特別なご馳走が頂けるのがだった。その日は、お汁粉を頂いた様に思う。買い食いの許されない私だったが、祖父のご馳走は例外だった。美味しかった。その事を話したくて堪らない。しかし、弟の手前、口外しない事が、決まりだった。

「ただいま！」ニコニコ顔で帰宅する。母は、「何を食べた？」と聞いた。公然の秘密とは、こういう事なのだろう。

## 染物工場

---

少なくなって来たとは言え、当時はまだ、何軒かの染物工場が、残っていた。建物の上に、背の高い物干しがあり、遠くからでも、そこが染物工場であることがわかった。もう既に、染物工場は斜陽だったのだろう、かつては軒を連ねていたと言うそれも、点在すると言った感じだった。時折、その物干には、長い浴衣の生地らしい染物が、風になびいていた事を思い出す。

その当時の神田川は、綺麗とは言えなかった様に思う。川の汚染よりも、経済の成長が優先されていたのだろう。それが、少しずつ、問題として扱われる様に変化して行った。公害問題、光化学スモッグ、河川の汚染、いずれも私が子供の頃に、大きく取り扱われた。時代は、徐々に、経済的な問題を解消し、その為に犠牲になっていた事に、目が向け始められたのだろう。その後、神田川には、蚊の駆除の為、鯉が放流される様になった。そして、徐々に、川も綺麗に変わって行った。

戦後からの復興と共にその副作用が出だしたのが、私の子供時代なのかも知れない。環境問題共に、その時代に大きく姿の表したのは、安保闘争だろう。早稲田の町も学生紛争の渦中にあった。「安保反対！」その主プレッヒコールを当時の子供達は、訳も分からずに叫んでいたのだった。

大隈講堂まで、徒歩2分。そこは、私の遊び場だった。隣にある予備校のチラシで、紙飛行機を折り、それを飛ばして遊んだものだ。大隈講堂の片隅の、現在は、大学のショップも、交通公社（現JTB）の出張所だった事が懐かしい。当時の早稲田大学は、一日中開いていて、近所の人には、大学の中を自由に歩いていた。私達も、自由に大学の中を歩き回り、銀杏の身が落ちる頃は、それを拾ったりしていた。そんな長閑な雰囲気も、学園紛争を機に、変化して行った。

学園紛争も、始めの頃は、安保反対の看板が並ぶ位だったが、その中、ヘルメットを冠り、タオルで覆面をし、角棒を持った学生のデモが始まり、バリケードが出来、機動隊が出動し始め、投石、催涙ガス、放水等で紛争は激化して行った。子供達は、事の真相は分からずに、その激しい戦いを目にしたのだった。その頃から、近所の家にも、投石の被害を避ける為に、窓ガラスに金網が張らる様になって行った。

何が、彼らをあれほどまでに、燃え上がらせたのだろう。事の是非は兎も角、今の政治への関心の度合いからは、想像が出来ない熱い物が渦巻いていたのだろう。

そして、学園紛争もいつの間にか鎮火した。以来、早稲田大学も夕方には、門が閉じられる様になった。

もし、私が、もう少し大人だったら？私も、学園紛争に参加していたのだろうか？所謂、ノンポリが主流だった世代の私は、未だに、そんな疑問が時に浮かんで来る。

## 銭湯

---

我が家には、私の沸かす風呂があったにも拘らず、祖父と共に銭湯へしばしば向かった。石けん箱を、手ぬぐいに来るんで、サンダルを突っ掛けて行く。お目当ては、風呂上がりのコヒー牛乳だった。

銭湯に着くと、大きな暖簾をくぐり、お気に入りの番号の下駄箱を捜す。3番1番は、人気で、なかなか空いている事が無かった。長島、王の人気の為だった。サンダルを下駄箱に突っ込み、木札を抜く。今度は、小さな暖簾をくぐり、番台で、風呂銭を払うのだった。番台には、お爺さんが、座っている事が常なのだが、時に、若奥さんが、その役を担った。その度に、私は、少し気恥ずかしかった様な気がする。

当時の銭湯には、ロッカーが無く、藤の籠に、着ていた物と木札を入れた。今考えると、少し物騒な気もするが、問題は起こらなかった。

洗い場は、いつも混雑していた。一人で、占有する出来る事は、稀だった。「すみません。」と声を掛け、お湯を分けてもらい、体を軽く流す。そして、湯船に浸かるという手順だった。湯船は、二つあり、一つは、熱く深かった。もう片方は、少し温めで浅かった。子供は、温い方と言う暗黙の掟の様な雰囲気があった。祖父は、熱い方へ、私は、温い方へ入った。

湯船から出ると、祖父の背中を流し、そして、私も背中を流してもらった。顔見知りも多く、銭湯は、男の社交の場だったのかも知れない。祖父の会話が終わる頃には、私は、逆上せかかっていた。

風呂上がりは、お目当てのコヒー牛乳だ。牛乳瓶を冷蔵庫から取り出し、番台でお金を払った。紙のキャップを、専用の栓抜きで開けた。何故か、牛乳を飲むポーズは、誰も同じだった。立ったまま、右手に牛乳瓶を持ち、左手は、腰に置いた。今は、銭湯がスーパー銭湯に変わり、籠はロッカーに、湯船も多様に、そして牛乳も自動販売機の中にある。まさに至れり尽くせりだ。代わりに、人との関係は、希薄になった様な気がしない訳でもない。

## 天ぷら

---

外食とは、縁のない家庭に育った為か、子供の頃の私にとって、食べ物屋さんは、憧れの存在だった。縁日の屋台が並ぶ大熊通りを抜けて、都電早稲田に向かう角に蕎麦屋さんがあった。ここでは、通りに面した大きなガラス窓越しに、大きな海老の天ぷらを揚げていた。そして、揚げられた天ぷらが、山の様に積まれていた。滅多に、そんなに大きな海老を口にする事の無かった私は、いつかは、それを食べてみたいと思ったものだ。大きく見えるのは、蕎麦屋さん独特の揚げ方で、その衣の為なのだが、そんな事とは露とも知らず、世の中には、巨大な海老がいるものだったと思ったものだ。

その天ぷらを子供の頃に口にする事は、とうとう無かった。しかし、高校生の頃に、偶然にも、実現した。郵便配達帰りに都電に乗ると、父の知り合いから、声が掛かった。「今日は、お袋の命日なんだ。一人じゃ照れくさいから、付合ってくれるか？」用の無い私は、お付き合いする事になり、雑司ヶ谷で、都電を降りた。お墓は、雑司ヶ谷霊園にあった。二人で、お墓の前で、手を合わせた。お墓参りを終え、再び都電に乗る。早稲田で降り二人して歩いていると、幸運が舞い降りた。

「そばでも、食べて行こう。」小父さんの声を機会に、二人で、件の蕎麦屋の暖簾をくぐった。「天ぷら蕎麦二つ。」席に着くなり、小父さんは注文した。良かった、と思った。自分から、天ぷら蕎麦と言うのは躊躇われたからだ。

「お待ちどうぞ。」念願の天ぷら蕎麦が、卓に置かれた。「頂きます。」私は、夢中で、蕎麦を手繰った。大きな天ぷらと、仄かな柚の香りがした。

## 映画館

---

穴八幡のあたりに映画館があった様な気がするが、記憶があやふやだ。映画の全盛期は過ぎ、徐々に、町の映画館も減少し始めた頃だったのかも知れない。それでも、ビデオが無い時代に、映画を見る手段は、映画館に行くしかなかった。ディズニーの映画や「サウンドオブミュージック」「チキチキバンバン」等を、叔父に見に連れて行ってもらった覚えがある。映画館は、新宿か銀座だった。一番印象に深い映画は、今でもある名画座の早稲田松竹で上映された「孫悟空」だ。これは、叔父ではなく、近所の知り合いの方が、連れて行ってくれた。名画座も、休みに合わせて、子供向けの映画を上映していたのだろう。

印象深いとは言え、その理由は、映画ではなく、映画の後に行った、ワンタンだ。映画の帰りに寄った、戸塚2丁目あたりの中華料理屋で、食べたワンタンが忘れられない。その味が忘れられないのではなく、ワンタンを食べたと言う事だけが、いつまでも頭の中に残っている。始めて、中華料理屋さんと言う所に入り、家のワンタンとは違う、それを口にした事が忘れられないのだ。それほど、外食と言う事が、特別な出来事だったのかも知れない。

戸塚と言う地名も、いつの間にか、西早稲田に変わった。戸塚2丁目と聞いて、あの辺りかと、分かる人も今は、少数派になっている事だろう。

## 物干竿

---

子供の頃の物干は、今よりも高い家が多かった様に思います。サザエさん家の様な感じですが。上の方に掛ける為にサスマタの様な棒を使っていました。それに、今の様に洗濯バサミの沢山ついた便利なグッズも無く、物干竿に、直接洗濯物を通していた様に思います。

竿もステンレスの物ではなく、単なる竹竿でしたが、その中にビニールで表面がラッピングされた物に、移り変わり、やがて、鉄とビニール、そしてステンレスと軽く、錆難い物になって行った様に思います。

洗濯バサミも同様に、竹の洗濯バサミから、アルミ、そしてプラスチックへと移り変わりました。便利になった様にも思いますが、プラスチックの洗濯バサミは、古くなると折れるので、竹の洗濯バサミも捨てた物ではないと見直したりします。良い所はあっても、現在ではコスト的には無理があるのかも知れません。

当時は、日本の人件費も安く、その為に竹の洗濯バサミの様な物も生産出来たのでしょうか。今も捜せばあるのでしょうか、きっと生産地は国外でしょう。私の生きている間に、あらゆる面で、本当に大きく変化した事を痛感します。

「タケヤー、サオダケ。タケヤー、サオダケ。」この売り声で、竹竿屋さんが、自転車にリヤカーを曳いて回っていました。当時としても、それ程売れていた様には、思われません。売れそうも無いものと言え、もう一つ、金魚屋さんが、思い浮かびます。「金魚一え、金魚。金魚一え、金魚。」そんな、売り声だった様に思います。売れたかどうかは分かりませんが、涼し気な夏の風物詩でした。

物売りと言え、サザエさんに登場する（テレビではなく、単行本です。）押し売り、と言う物が存在しました。家々を訪れて、ガラクタを、同情を引く話や脅したりして売りつける輩です。我が家は、父が、いつも家で仕事をしていたので、そんな被害は無かった様ですが、社会的な問題だった様に思います。景気は上向きではあっても、まだまだ、世の中は安定していなかったのかも知れません。

## 竹と沈丁花

---

我が家には、玄関先に、竹と沈丁花が生えていた。風流と言えば風流かも知れないが、植えた風情ではなく、単に生えているという風だった。

沈丁花の香りは、癖があり、好きになれなかった。それも今では、懐かしい香りになった様だ。どこかで、その香りがすると、沈丁花の花を捜す自分に驚く。嫌いと言うのは、好きと言う事と、割と近いのかもしれない。

それと比べると竹は、無表情な気がする。単に、笹の葉を付けるだけで、香りも無く、いつも同じ姿をしている。笹の葉を取り、それで船を造り、雨上がりの水たまりに浮かべたりした。言葉にするとは綺麗な感じもするが、雨上がりの水たまりは、土で濁っていた。

そんな無表情な竹もいつの日か、地味な花を付け、やがて枯れた。竹は、数十年に一度花を咲かせ、枯れるらしい。非常に珍しい光景だったのだが、地味な花の為か、花の印象も無く、単に枯れた事だけが、記憶に残っている。

子供の頃は、見窄らしい我が家が好きにはなれなかった。もう少しで良いから、洒落た家に住みたいと思ったものだ。しかし、今になれば、陋屋に竹と沈丁花、そんな家も悪い物ではないと思うのだった。

## 仕事場

---

当時の早稲田は、製本屋さん、商店、職人さん等、家で仕事をしている人も多かった。唐木職人の我が家もその例に漏れず、学校から帰ってくれば、必ず父がいた。叱られる訳ではないが、いつも父がいる事が鬱陶しく感じられ、帰って来ても、お父さんのいないサラリーマンの家庭に憧れた。父がいるだけで、重苦しい雰囲気があった。それだけ、父の存在が大きかったと言う事なのだろう。

そんな父が、時たま出張に出かける時がある。その時は、別段何がある訳でもないが、解放された様な感じがした。少し位の我が侘を言っても、母だけならば、許される。そんな計算を子供ながらしていたのかも知れない。

そんな鬱陶しい父の存在ではあったが、私の遊び場は、仕事場だった。鉋を掛けたり、釘を打ったり、鋸を使う、父の姿を見ながら育ったのだった。物を作ると言う事が、興味の対象だったのである。気の切れ端を意味も無く組み合わせて、釘を打ったりして、遊ぶ事も多かった。刃物も身の回りにあったのだが、怪我をしない様に最低限の注意だけ言い渡され、断りさえすれば、自由に道具を使うことが出来た。使える物をこさえるは、出来なくても、気分は職人だった。

遊んでいるばかりではなく、手伝いも屢々だった。山の様に積まれた、引き出しの枠に、ベニヤの底板を入れるのは、専ら私の仕事だった。入れても入れても、次々に増えて行く新たな枠にウンザリした事も懐かしい。製品にサンドペーパーを掛けるのも、私の仕事だ。「端を磨けば、真ん中は磨けている。」と父が教えてくれた。成る程、端さえ磨けば、後は、ざっと磨けば良いと言う事を体感した。それは、雑巾掛けでも、同じだった。効率的な仕事の仕方を子供の頃から仕込まれていたのだ。私は職人には、ならなかったが、職人の修行と言うのは、きっとこんな事の繰り返しなのだろうと思う。

サンドペーパーで磨くと言うのは、単純な上に、指の皮が剥ける、嫌な仕事だ。一つや二つ、磨く中は、仕上がって行く楽しさを感じる事も出来るのだが、山ほど磨くと、皮が剥け、その単純さ故、飽き飽きした。それでも、決められた量をこなすまでは、解放されない。嫌がおうにも、効率を考えない訳には行かないのだった。

擦り切れて指紋の無くなった指の皮を見て、仕事していると納得していたのかも知れない。今の自分の綺麗すぎる手を見ると、少し哀しい気もする。父の仕事を継げなかった事への未練なのだろうか。

## 蠟石

---

まだまだ車のが少なかった。家の前の道路は、子供達の遊び場だった。今はあまり見かけなくなった蠟石で、道に絵を描いたり、円を十個描いてケンケンパで遊んだりした。今は道路に落書きを見かける事も無くなってしまった様な気がする。

鬼が電信柱の所に留まる「だるまさんがころんだ」も、定番の遊びだった。その頃は、近所の子供達が、年齢に関係なく一緒に遊んでいた。そして、ハンディなのか、小さな子は、オミソと呼ばれ、たとえ負けたとしても鬼からの対象から外された。「お前はオミソな！」と年長さんから指名されると、鬼にはならない事に安心はしたものの、一人前ではない事を実感したのだった。いつかは、一人前に扱われ、オミソと呼ばれなくなる日を夢見るのだった。

今の道は、子供が遊ぶには、危険すぎるのだろう。道から子供の声が聞こえなくなって久しい。

## アイスクリーム

---

アイスクリームと言えば、「小倉モナカ」なのです。注文してから、丸いアイスクリーム用のオタマで、搦って、モナカの皮に入れてくれました。お気に入りだったのですが、小学生になった頃には、そのお店は、無くなりました。

その後の定番は、「ホームランアイス」でした。美味しいとか言う前に、もう一本貰えるかも知れないと言う魅力に惹かれたのだと思います。ホームラン・バーなら一本で、ヒットなら四本で、アイスと交換出来た様に記憶していますが、ヒットは、定かではありません。今の様に、冷凍庫にアイスを買置きする事等出来ませんでしたから、夏の暑い日の三時に、父が、「アイスを買って来てくれ！」と言うのが、とても楽しみでした。こんな時は、父が家で仕事をしているのも良いなと思ったものです。

今でも、散歩の時に、丸いモナカのアイスを見つけると、つつい買ってしまいます。外で食べるそれは、とても美味しいのですが、何か昔の味ではない様な気がします。美味し過ぎる、上品過ぎる、そんな違和感なのかも知れません。

いつの頃からか、コンビニで、「ホームランアイス」が置かれる様になりました。これで、いつでも食べられる様になった訳です。でも、なんとなく買う気になりません。思い出は、少し手の届かない所にあって欲しいのかも知れません。

## 桃の刺青

---

祖父の腕には、桃の刺青があった。内側の肘に輪郭だけに墨が入れられていたが、もう、色も薄くなって、右だったのか左だったのかさえ思い出せない。この刺青は、祖父が職人仲間と義兄弟の印として入れたものらしいのだが、輪郭を入れた時点で、お師匠様に見つかり大目玉。そのため、その状態のままが腕に残ったものだった。

私の子供の頃は、銭湯に行くと、背中に刺青の入った人も散見した。それでも、別段違和感も無く、みんなが接していた。祖父がそうであった様に、職人の中には、刺青を入れていた人も少なからずいたのかもしれない。まだまだ、古い名残の中で、生活が営まれていたのかも知れない。

とは言え、刺青を入れると言う事は、やはり特別な事であった事は、祖父が、師匠から大目玉を食らった事からも想像出来る。義兄弟の証しとは言え、それを入れる時の祖父の気持ちは、どんなだったのだろう。色々想像はしてみるものの、優しかった祖父の姿しか浮かんでこない。事が事だけに、祖父がその心境を、子供の叔父や叔母に伝えている事も無さそうに思われる。

輪郭だけの桃の刺青。現代であれば可愛いタツメの様に感じられる。しかし、当時の認識は、中途半端な刺青でしかなかったであろう。そんな祖父の気持ちを最早知る術も無いが、それで良いのかも知れない。

## 日の丸

---

日の丸で、頭に思い浮かぶのは、国旗ではなく、お子様ランチ。デパートには、レストラン外ではなく食堂があり、子供が食べるのは、大概、お子様ランチだった。オカズは、どんな物だったのか思い出せないが、小さな山形のケチャップライスに、小さな日の丸が、刺さっていた事が鮮明に残っている。チキンライスではなく、ケチャップライスだった様に思う。

私は、この日の丸がよほど気に入ったらしい。以来家で出て来る、チキンライスにも、手作りの日の丸が、刺さる様になった。子供の喜ぶ事をなんとか叶えたいと言う親心なのだ。他愛も無い事だけれど、出来る事ならばなんでもして上げたい。それが、親と言う者なのだろう。子供のいない私には、そう感じる事しか出来ない。

デパートのもう一つの楽しみは、屋上のゲームだった。一回分だけの小銭を貰い、一回限りのゲームに夢中になった。私は、ゲームを選ぶのに悩んだ末に、パチンコの変形の野球ゲームで勝負した。幸運な事に、最後の玉が、ホームラン。私は、再ゲームを楽しむ事になった。一度ホームランの味をしめた私は、今度もホームランで再ゲームと、確信した。結果は、無惨に敗退。そうは問屋が下ろさない。諦め切れない私は、珍しく父にオネダリした。「もう一回やっても良い?」「やっても良いけど、帰りは歩きだぞ!」と、条件付きで父の許しを得た。柳の下に泥鰯は、何匹もいない。やはり、またもや無惨に敗退。傍らで見ていた父は、微笑んでいた。

「じゃあ、帰るか。」父が言った。「うん。」私は、トボトボと父に従った。帰りは、歩きではなく、バスに乗って帰った。私は、ホッとした様な気がする。

## タイツ

---

私の子供の頃は、冬でも、小学生は半ズボンだった。その為、寒くなるとタイツを履かされた。私は、このタイツが、あまり好きではなかった。女の子っぽい気がからだった。力道山と同じ黒のタイツならまだしも、青とか白のそれだと学校に行きたく無く成る程嫌だった。それでも、そんな理由で休める筈も無く、学校へ行き憂鬱な日を過ごした。

寒さが厳しくなると、それに、青い毛糸のパンツが追加された。外からは見えないものの、それが嫌で嫌で堪らなかった。体躯の時間がある日は、最悪だった。私は、その毛糸のパンツを半ズボンと一緒に脱ぎ、皆に気取られない様に、両方を丸めて隠した。今思えば、皆も履いていたのだから恥ずかしがる必要は無い。でも、皆同様に匿していた。大した理由等無く、単にカッコワルイからだったのだろう。

子供の頃は、何故か、トイレの個室、鼻を擤む等の当たり前の事が、非常に恥ずかしかった。大人になるに従って、そんな気持ちが薄らいで行った事が不思議な気がしてならない。

そんな気持ちの名残なのか、今でも、股引を履く事に抵抗を感じる。寒いのだから履いた方が快適なのだが、履く気にならない。股引と言う語感が嫌なのかも知れないが、それが、ズボンの裾から覗いていると思うだけでゾットする。歳重ねたても、無駄な我慢も必要なのだ。

齊藤裕樹選手のインタビューを聞いていると、叔父と度々行った早稲田の優勝パレードの事が甦って来た。六大学野球の優勝が決まった夕方に、戸塚（現西早稲田）まで、散歩がてらにパレードを見に行ったものだ。お目当ては、パレードではなく、応援グッズ。応援に使った、えび茶の早稲田カラーの紙の傘や、紙の角帽を、観戦に行ったであろう大学生から頂けるのだった。大人よりも子供の方が、その恩恵に預かり易かったのだろう。叔父は、私を出しに使っていたのかも知れない。

優勝の興奮の為か学生達は、気前良く、それを子供達に与えた。中には、ボロボロの傘もあったが、その方が応援の余韻が感じられる気もする。しかし、当時の私は、出来るだけ綺麗な物を手に入れる為に、知恵を絞っていた様な気がする。

その傘には、横山隆一のフクちゃんが描かれていた。私の早稲田大学への印象は、フクちゃんといび茶のカラーなのだ。そしてそれは、優勝パレードの時に焼き付けられたのだと思う。

早稲田大学出身ではないが、未だに早稲田を応援してしまうのは、幼き頃に刷り込まれたのだろう。それが、地元意識と言うものなのだろう。

## 脱脂粉乳

---

小学校に入学した年は、牛乳ではなく脱脂粉乳だった。大きなアルマイトのポットで、教室へ運ばれ、個々の小さなアルマイトの器に注がれるのだった。私は、この脱脂粉乳が好きになれなかった。それは、注がれてから暫く経つと表面に貼る膜が嫌いだったからだ。飲む前に、先割れスプーンで除けるのだが、その薄い膜が、気持ち悪く感じられた。そして、少し甘いその味もその一因だった。

その影響か、私は未だに低脂肪牛乳の味が好きになれない。どうしても、脱脂粉乳が思い浮かんでしまうのだ。

その脱脂粉乳も翌年になると瓶に入った牛乳に代わった。冷たい牛乳に、ホッとした。これで、あのの不気味な膜から解放されたのだった。

時折、コーヒー牛乳が出た様な気がする。その時は、瓶ではなく、今は見る事も無くなった三角形のテトラパックに入っていた。あの三角形の容器は、どこに行ってしまったのだろう。

## クジラ

---

当時はクジラが給食で出された。噛み切れない筋もあり、評判は余り芳しい物ではなかった様に思う。給食に限らず、我が家では、クジラが食卓に上がった。クジラの赤身のステーキ、殆どが脂身のクジラのベーコン。好きでもなかったが、嫌いでもない、そんなオカズだった。

私は、高学年になるまで、ベーコンと言うのは、回りが赤く染められたクジラのそれだとばかり思っていた。豚のベーコンが、我が家では、出る事がなかったのだった。そのベーコンを辛子たっぷりの醤油に浸して、食べる為か、クジラの味と言うよりは、辛子醤油の味で口の中が一杯になった。私にとって、クジラは、そんな希薄な存在感でしかなかったのだ。

ある時、父が、「クジラの脂が少しのったのを、テラッと炙って食べると美味しい」と言った事があった。給食のクジラと食卓に上がるそれとは、違うらしい。子供心に一度食べてみたいと思ったが、そんな思いも、いつの間にやら消え去っていた。

社会人となり、ある店で、その言葉が甦る。ミンククジラの尾の身の刺身だった。その味は、美味しい牛肉の刺身を遥かに越えていた。牛肉の脂よりも低い温度で解けるのか、刺身で食べるには、牛肉よりも勝っている様だ。上等なマグロのトロと牛肉の刺身の良いところ取り。これが父の言っていたクジラなのだと直感した。これをテラッと炙れば、絶品である事は、間違いない。外食をしない父は、この味をどこで覚えたのだろうか。私の知らない父の青春時代があるのだと頷いた。

今となっては、クジラは貴重品だ。スーパーで偶に見かけるベーコンの値段に驚く。クジラを穫っても良いではないか？とも思いながら、美味しい思い出だけでも、それはそれで良いのだと納得するのだった。

## パン

---

給食は、いつもパンだった。否、たまにソフト麺が出たが、ご飯の給食が始まったのは、給食と縁が亡くなってからだった。給食で、カレーライスが食べられなかった事を残念に思う。

普段は、ほぼ正方形の食パンが2枚だったが、時に、砂糖がたっぷりまぶされた揚げパン、ソーセージとレタスの入った温かくは無い、ホットドッグの様な物が配られる事もあった。これらは、食パンではなく、コッペパンだった。この二つは、私だけでなく、皆の人気があった。美味しいと言う事もあるのだろうが、いつもと違う特別な雰囲気、その理由だった様に思う。

ソフト麺の時でも先割れスプーンだった。多分、食べ難かったと思うが、先割れスプーンで、給食は食べるものと信じていた為か、不便や不満を感じる事も無く、それを平らげていた。アルマイトのお盆、アルマイトの食器、先割れスプーン。今考えれば、味気ない気もするが、そんな事に気にかける時代ではなかったのだった。

時に、2枚のパンを食べ切れずに、1枚を残す事もある。そんな時は、それをハンカチに包んで、家に持ち帰った。そして、家に帰れば遊びに夢中で、食パンの事は、忘れる。青カビの生えた食パンが、ランドセルから発見される事もしばしば。母に見つからない様に、コッソリ処分した事も懐かしい。

## 蒸かしご飯

---

幼稚園に上がる前の私は、伯（叔）母さん子だった。弟が生まれてから、母の手は、弟中心と変わり、一人で遊んでいる私を見かねて彼女達は、私を自宅に連れて行かれた。連れて行って貰ったと言うべきなのだろうが、私には、自主的にお願いした記憶が無いので、連れて行かれたと言う印象が正直な所なのだった。

近所に住んでいた叔母には、東京タワーに連れて行かれた。「赤い電気が点いていた！」と何度も興奮気味に繰り返したらしいが、私には、その記憶は全く無く、小学生になってからも、何度もその話しを面白そうに繰り返す叔母に閉口した。記憶に無い事で、からかわれるのは、子供ながら心外だったのだ。

越谷の伯母の所には、電車に乗れることが嬉しかった。子供に取っては、旅行気分だったのかも知れない。その伯母の家には、何泊もした。居酒屋を営んでいた伯父の店の前の溝に、小石を落とすと、蚊が飛び出して来る事が面白く、飽きるまで小石を落とし続けた事を思い出す。

お客さんである事を良い事に、私は、我が侘放題だった様だ。ある昼ご飯、私はこう言ったそうだ。「温かいご飯じゃないと嫌だ！」それに対して伯父は、「将来大物になるかも知れないな。蒸かしてでも良いから、温かくして上げな。」大人では、絶対口に出来ない事を言えたのは、大物ではなく子供だからだろう。

伯父の予想も空しく、私は、いたって普通の生活を送っている。

## アサリ

---

給食は、残さない事がルールだった。好き嫌いは別として、私には、一つだけ食べられない物があった。アサリだ。食感と貝独特の濃い味がダメなのだ。我慢して口の中に放り込んでも、その瞬間に広がる貝の味を感じると、飲み込むことが出来ずに戻した。

給食にアサリが出る事は稀ではあったが、それが出された時は、目の前が暗くなる。その姿を見ただけで、その恐怖がフラッシュバックして来るのだった。いつもは、直ぐに終わる給食も、その日は、最後までお皿と睨めっこが続き、時間終了で解放されるのだった。私は今でも、無理してでも食べる事に意味があるのか疑問に思う。どうしても食べられない物もあるのだ。

食べられるが嫌いな物は、沢山あった。ピーマン、ニンジン、蜂蜜、椎茸、数えれば切りが無い。それでも、それらは、無理をすれば食べることが出来た。アサリだけは、何度挑戦してもダメだった。

いつしか大人になり、嫌いだった物も、それ程、嫌いではなくなり、反対に好きにさえなった物もある。私の味覚が代わった事もあるのだろうが、素材自体の味が変化している様にも思う。

癖の強かったピーマンやニンジンは、どこへ行ってしまったのだろう。そう感じるのは、単なる郷愁だけではない様な気がする。

## カキアゲ

---

夕餉の準備をしている母に、オカズは何かと尋ねた。毎日確認する為か、母は、面倒くさそうに、「カキアゲ」と言い放った。私は、ガッカリした。「何で食べられない貝を出すの？」と抗議した。「貝じゃないから・・・」五月蠅いとばかりの返事が返って来た。私は、カキは貝だと思いながら、憂鬱な夕飯を迎えた。

オカズは、私の意に反して、タマネギとサクラエビの天ぷらだった。ほっと胸を撫で下ろした。初めて、カキアゲという言葉を知ったのだった。「ほら、貝じゃないでしょ！」母は、やっと息子の不満から解放されたのだった。

今でも、スーパーに並んでいるカキアゲを見る度に、この事を思い出す。

大人になってからも、同じ様な勘違いをした事がある。居酒屋で、誰かが、カイワレを注文した。私は、思わず、貝は食べられないと、軽く抗議した。すると、「貝じゃないから！」といなされた。出て来た物は、勿論、貝割れ大根だった。食べられないのだったら、食べなければ良いだけの事なのに・・・。いつまでも、大人に慣れ切れない自分が恥ずかしい。

社会に出たばかりの頃、課長に連れて行かれたスナックで、お通しに、シラスおろしが出された。私は、シラスの目のジャリジャリした感覚が好きではない。思わず「シラス、食べられないんです。」と漏らした。ママさんは、「そう言う時は、黙って残しておけば良いのよ。」と諭した。私は、大人とは、そう言う物である事を知ったのだった。

好き嫌いの多い私は、未だ大人になり切れない気がしている。

## コロッケ

---

叔父と父との家内制手工業の典型だった我が家は、日曜日でも仕事をしていた。そのため、日曜日にどこかへ連れて行って貰った記憶は、数える程しか浮かばない。日曜日の楽しみは、お昼の揚げ立てのコロッケだった。母も仕事を手伝っていたので、家で揚げるのではなく、肉屋さんの総菜だったが、揚げ立てのそれは、私の大好物だった。

11時45分になると、買い物籠を片手に、その肉屋さんへ向かう。コロッケの買い出しは、私の役割だったのだ。コロッケを注文すると、注文の個数をフライヤーに滑り込ませる。端で、ひっくり返し、上がる状態を、お店の人と共に見守る。時に、追加のラードを入れたりする光景が、面白かった。出来上がった、熱々のそれを、経木に包んでもらうと、走って家に戻った。

ジャガイモの中に、ほんの少しの挽肉のコロッケだった。素朴ではあったが、それは至福のオカズだった。私の習いは、マヨネーズとソースだ。口の中で、味が渾然一体となった。

今でも、コロッケの類いは大好物だが、レストランのコロッケは、どれも、美味し過ぎて、ご飯のオカズの気がしない。酒のツマミに感じられてしまうのだ。ご飯には、素っ気ないくらいのコロッケに、マヨネーズとソース。私の味覚は、子供の頃から変わらない様だ。

## 綿飴

---

縁日に行くと、気になる物があった。それは、ピンクと白の2色の綿飴だ。我が家では、買い食いは、許されていない。当然、綿飴は手の届かない物だったのだ。買っては、貰えないと思えば思うほど、それは魅力的な食べ物に思える。すれ違う同世代の子供が、それを食べる姿が、羨ましくて仕方が無かった。

そんな姿を見かねたのか、一度だけ、父が綿飴を買ってくれた事がある。歩きながら食べる事は、許されず絵の描かれたビニール袋に、2つ入れられた、綿飴を大事に家まで持って帰った。

家に帰り、それを小さく千切り、口の中へ放り込んでみる。砂糖だった。単に砂糖の味がするだけだった。期待が大きかった分、ガツカリの度合いも大きかった。そんな私を見つけて父は、からかった。「美味しいか？」私は、意地で、「うん。」と言った様な気がする。以来、綿飴を食べた事が無い。

いつの頃からか、駄菓子屋さんの店先に、綿飴マシーンが設置された。10円を投入すると、綿飴が、吹き出て、それを割り箸に搦めると言う物だ。私も、それを搦めたいとは思うものの、興味は、そこまでだった。余程、その味に失望したのだろう。私が、甘い物をあまり好まないのは、この事が理由の様気がする。

## ショートケーキ

---

今では、珍しくも無いケーキだが、子供の頃には、お客様のお土産以外では、お目にかかる事も無かった。当時は、ケーキ屋さんも数少なく、我が家への頂き物は、いつも目白にあるボストンのショートケーキであった。私は、そのボストンの包装紙を目敏く見つけ、舌鼓を打った物だった。確か、赤の地に白のレースの模様の包装紙だった様に思う。

ケーキの種類もショートケーキかモンブランぐらいの物だった。私は、赤いイチゴの乗ったショートケーキを迷わず選んだものだ。今では、好物のモンブランも、子供に取っては、地味な印象だった。現在でもそうであるが、普段は口に入らない物が頂ける。それが、お土産の魅力なのだろう。そう言う意味では、流通の発達した現在、気の利いたお土産を見つけると言うのは、至難の事なのかも知れない。お土産を紹介する本が、売れるのも理解出来るが、その反面、それが、そのお土産の価値を下げている様な気もする。

目白にしかなかったボストンもやがて高田馬場にもお店が出来、ケーキも段々と特別な物では無くなって行った。歳と共に、ワクワクする様なご馳走が少なくなり始めたのは、自分が変わったからなのだろうか。それとも流通が発達した為なのだろうか。何でも手に入ると言う生活も、さほど楽しいものではないのかも知れない。

## プリン

---

給食では、時にプリンが出たが、カラメルがなかった様に記憶している。白濁したビニールのカップに、黄色いプリンだけが入っていて、茶色のカラメルは底には無かった。私は、プリンとは、それだとばかり思っていたのだが、スーパーで売っているプリンのキットの絵は、プリンの山の上から茶色い物が掛かっている事を知った。その当時、出来合いのプリンをスーパーで見かける事は、無かった様に記憶している。

ある日母が、そのプリンのキットを買って来てくれた。これで、茶色のシロップの掛かったプリンが食べられる筈だった。しかし、その願いは、その時には、叶わなかった。

母の出かけたある日、父は、そのキットを見つけ、「作ってやろうか？」と私達兄弟に言った。一も二もなく同意した。父は、順調にプリンを作り始めたのだったが、最後に、「この茶色いのは、入れるのか？」と、私に確認した。「うん。そうだよ。」私は、カップの底に入れて、と言うつもりだったのだが、父の行動は、違った物だった。父は、そのシロップをプリンの液体と一緒に入れた。この時に、私の願いは、果無く消えたのだ。そして、すこし茶色くなったプリンの液体が、カップに注がれ、冷蔵庫に入れられた。

この時のプリンの味を、私は、思い返すことが出来ない。多分、美味しかった様な気がする。明確に目に浮かぶのは、その少し茶色いプリンの色だけだ。その後、願いは叶ったのだろうが、その記憶は、一切無い。ほろ苦い位の思い出だけが、回想出来るのかもしれない。

## 鏡開き

---

一月の十一日には、お供えだったお餅を割った。大家族の為か、そのお供えは、かなり大きな物で、割るのも大変だが、食べ応えは、十分だった。開くのだから、勿論割らなければならないのだが、そもそも乾燥していて硬くなったそれは、包丁で切れる代物ではなかった。私は、父の仕事場から、玄翁とドライバを借りて来て、それを割り、時にドライバーで、こじ開けた。

鏡開きの当日は、お汁粉で頂くのだが、我が家のお汁粉は、お汁粉と言うよりも、アンコであった。私は、当時売られていた、即席汁粉の様な水っぽい物が食べた方のだが、それは叶わぬ事であった。我が家のお汁粉は、粒あんのアンコが、習わしだった。

私の楽しみは、残りの持ちを、揚げた物だ。綿ばかりの餅では、未だ水分が残っている為、膨らみ過ぎてかき餅には、不向きだ。割ったそれを、一週間位、籠の中で乾燥させてから揚げなければならないのだが、それを待ち切れないで、何度も、母に懇願したが、受け入れては貰えなかった。時を待つ事が、辛かった事を思い出す。

油で揚げた餅に、塩をふりかけるだけの素朴な物であったが、その美味しさに、舌鼓を打ちながら、頬張った。揚げ立ても美味しいのだが、私の好みは、冷めてからのそれだった。表面は、サクサク、中に少しだけのこった揚げ切られていないお餅が、大好きなのだ。硬いのだが、口の中に停めておくと、次第に甘くなって行く。その感覚が好きだった。

今の我が家のお供えは、底のビニールを開くだけ。底から出て来るのは、パック詰め切り餅。カビもしないし、硬くもならない。便利と言えれば便利なのだが、乾燥したお餅とは、縁遠くなってしまった。その味を忘れられず、パックを剥がし、わざわざ乾燥させて、それを食べる私は、愚か者なのかもしれない。

## ホットドッグ

---

ハンバーガーは、ポパイに出て来る小父さんが食べていたので、何となく知っているが、実態の分からない魅惑の食べ物だった。しかし、ハンバーガーショップは、私の知る限り未だ無かった。その代わりと言う訳ではないのだろうが、ホットドッグの移動販売が、始まり出した頃だった。軽のバンで、そのホットドッグ屋さんはやって来て、大隈講堂の脇で、毎日営業していた。

勝手は貰えない事は分かっていたので、私の楽しみは、そのホットドッグ屋さんが、ホットドッグを作る手順をつぶさに観察する事だった。ソーセージは、予め温められていて、注文が入ると、パンをオーブントースターに入れて温める、それに、カレー味のキャベツとソーセージを乗せて完成。お客さんが、自由に、カラシとケチャップを掛ける。飽きもせずに眺めていたのは、食いしん坊のせいだろう。

諦めていたそのホットドッグは、意外な事に、口に来る様になった。冬になると連れて行って貰える、代原宿のアイススケート場で、ホットドッグ屋さんが出来たのだった。いつもは、買い食いを許されないのだったが、その時だけは例外となった。滑り終わった後に、ホットドッグが恒例となったのだった。

その店も、カレー味のキャベツが入っていた。当時のホットドッグには、必ずそのキャベツが付き物だったのだが、今のホットドッグには、その姿を見かけなくなったのは、何となく寂しい気がする。

あのキャベツは何だったのだろうか？ザワークラウトの代わりだったのかも知れないが、味は、異な物だ。今のソーセージの味には、不釣り合いなのかとも思う。少しショボイ味のソーセージだからこそカレー味のキャベツなのかも知れない。

この頃は、雀荘が沢山あった。我が家の側にも、雀荘があり、日がなジャラジャラという牌をかき回す音が聞こえていた。殆どの卓は、埋まっていた、窓の中は、タバコの煙で、白みがかっていた様に思う。現在の早稲田は、雀荘の数がめっきり減り、その数を片手で確認出来るほどになっている。窓からのぞく、店の中は、空卓が目立つ様に変わった。

身近に雀荘があった為か、麻雀には興味津々だった。我が家で開かれる、新年の麻雀大会の様子を後ろから眺めていたものだ。「見てても良い？」と叔父達に確認するのが習わしだった。

「黙って見ているのなら、いいよ。」見る時の掟と共に、許可が下りる。これもいつもの事だった。

ルール等知らなくても、興味を持って眺めていれば、何となくルールらしき物は掴めて来る物だ。こういう場合の子供の観察力、集中力は侮れない。いつしか、叔父の手を見て、興奮していた。周りの人から見れば、状況は筒抜けだったと思う。大人達は、バカな話しをしながら、麻雀を打つ。麻雀も面白かったが、その会派を聞きながら、少し大人の世界に触れたと勘違いしていたのかも知れない。

そんな子供だった為か、高専生になってからは、勉強等に目もくれず、麻雀三味の学生生活となった。毎日の様に通った鮫洲の雀荘も今はもう無い。毎朝聞いた、代書屋さんの呼び声も、いつの間にか過去の物となった。時代は移って行っているのだ。そんな中で、昔通った中華料理屋を見つけると懐かしい。早稲田も鮫洲も、最早、私の育った場所ではなく、名残が残る所なのだ。

## 四人ピンポン

---

四人ピンポンと言う遊びが流行った。ピンポンと言いながらも、ピンポン球も卓球台も使わないものだ。地面に、チョークで4つのエリアを作り、ドッジボールで、ワンバウンドしたボールを打つと遊びだ。特徴的なのは、1番、2番、3番、4番と階層化されていて、ミスをすると降格する。4番が降格すると、次の人に代わるのだ。1番、2番は対角で向かい合い、2番の左が、4番、右が3番だった様に思う。

ゲームは、1番がボールを2番のエリアに、手でトスする事から始まる。通常の場合、2番は、4番へ意地の悪いボールを返すと言うパターンだった。つまり、4番が一番不利で、大概は、始めの一撃で、次の人へと代わると言う不公平極まり無い遊びだった。1番、2番は、ほぼ安全圏で、休み時間中遊べる事が約束されている様なポジションだった。

不公平ではあるが、順番を待っている友達もいる為か、2番が4番を集中攻撃しても、さほど不満も上がらなかった。とは言え、時に2番が、1番を急襲するという謀反が無い訳ではなかった。安心しきっていれば、その座は、奪われた。

今でも、この遊びは、存在するのだろうか？ある意味で、社会の縮図の様なこの遊びが、今も引き継がれているのか、興味深い。残っていて欲しいが、もう、無い様な気もする。

## スキップ

---

少しでも嬉しい事があると、友達は、スキップした。私は、しらっとした顔で、その後ろを歩いていた。私は、スキップが出来なかったのだ。五十を過ぎた今は、スキップは出来る様になったが、それを披露する機会は無くなった。今となっては、無用の能力だ。

私は、運動神経が悪いのだ。スキップだけでなく、跳び箱を跳ぶ事も、自転車に乗る事も、なかなか出来なかった。ウンチというのは、子供の世界では、哀しい程、肩身が狭いものだ。友達からも、そして、親からさえも、そう思われている事は、辛かった。

運動神経の為か、走る事も遅かった。「背が高いくせに！」と言われたが、背の高さと、足の速さに関係があるのかと、疑問と不満を抱えた。「笑いながら走っているから遅いんだ！」と、運動会の後、母が言った。そうなのかも知れない。私には、競争心と言う物が欠如していた。否、ウンチと言うレッテルで、諦めていたのだろう。

それでも、いつの間にか、跳び箱も自転車もクリアする事が出来た。出来てしまえば、何で出来なかったのだろうと不思議に思う。振り返ると、運動神経の問題それよりも、未知の体験への恐怖心が、大きな原因だったと感じる。私は、臆病者なのだ。そして、それは、今もそのままだ。

私は、他人と会っている時に、大量の酒と煙草が必要とする。それは、臆病の現れなのだ。素面では、人も前にいる事が堪え切れず、会話が途絶える恐怖心を紛らわす為に、煙草をくゆらすのだ。生まれ持った物は、なかなか変わらない。

出来る様に思っているスキップも一人だから出来るのかも知れない。皆の前で、スキップをしたら無様な姿を曝す事だろう。スキップする機会が無い事は、私にとっては幸いなのだろう。

## 後楽園

---

遊園地へ行った記憶は、殆ど無いが、微かに残っているのが、後楽園だ。多分、新聞屋さんから頂いた優待券だったのだと思う。母とジェットコースターに乗った事だけが、思い出せる唯一の記憶だ。弟も一緒だったと思うのだが、まだ小さかったから、一緒に乗れなかったのかも知れない。他の乗り物にも多少は乗ったのだろうが、少しも印象が無い事が、不思議な気がする。

当時の遊園地と言えば、後楽園と豊島園位だったのではないだろうか。花屋敷もあったが、早稲田からは、遠い為か、私の印象には無い。豊島園は、叔母の勤めていた銀行の運動会が、毎年開かれ、何度か一緒に参加した。その為か、遊園地と言うよりも、広い運動場の印象の方が強い。早稲田から高田馬場までは都バス、高田馬場から池袋まで山の手線に乗り、池袋から豊島園まで、西武線で行く。子供に取っては、小旅行だった。運動会よりも、旅行気分が魅力だった様だ。

池袋の駅は、私にとって印象深い。それは、西武池袋にある、車止めの×が点灯していたからだ。何故、池袋には、それがいいのか不思議であり、それによって、西武池袋は特別な駅となった。まだ、終着駅というものが、理解出来ていないのだった。

終着駅と言えば、ローマのテルミナを思い出す。初めての海外旅行だったから、なおの事なのかも知れない。恥ずかしながら、ターミナルとステーションの違いを、この時、初めて理解したのだった。終着駅という語感に哀愁を感じるのは、私だけだろうか。夜行列車に乗った、テルミナが、今も印象に残っている。

## 飛行機

---

鉄棒で飛行機が流行った事があった。飛行機とは、鉄棒の上に立ち、両手で鉄棒を握り、足は両手を挟む位置に置いてから、体を後ろに回し、体が鉄棒の前に出た辺りで、手を離して飛び出すと言う物だ。そして、その飛行距離を争った。足を、両手を挟む位置ではなく、両手の間に置いた飛び方をジェットと呼んでいた。

ウンチの上に、恐がりの私は、なかなか飛ぶ事が出来なかった。アスファルトの校庭にある鉄棒で、練習するのだが、失敗すれば硬いアスファルトにぶつかると思うと体が硬直し、何度も無様に、飛び出す前に断念するのだった。そんな私を尻目に、女の子達が、飛行機で飛び出す様になって行った。情けなかったが、その思いだけでは、恐怖心を拭い去る事は出来なかった。

学校が終わり、近所の公園に向かうと、そこでも、皆が飛行機で遊んでいた。公園は、アスファルトではなく土だった。そんな少しの安心からか、私は、もう一度だけ挑戦してみる事にした。不完全ではあるが、飛行機らしき状態で飛び出す事が出来たのだった。一度でも出来てしまえば、恐怖心も薄らいで行く。何度か繰り返す中に、それらしく飛べる様になった。そして、ジェットも難無くクリアする事となった。しかし、飛距離は、それ程ではなかった。

学校の鉄棒で試してみる。やはり、飛べた。出来てしまえば、今まで抱えていた問題は、霧散してしまうものだ。ようやく、私も皆に混じって飛行機、ジェットに参加する事が出来る様になったのだった。

その喜びも束の間物だった。新たな技が、開発されたのだった。鉄棒に立つ所までは、同じなのだが、後ろから回り出すのではなく、一度前に回り出し、体が鉄棒の後ろまで回転する、そして、その様態から体が再び鉄棒の前に来た時に手を離すと言う物だった。飛行機に前方への半回転が追加されると言う技だった。

私は、何度も練習したが、前に回る時の眼前に迫り来る地面の恐怖心に打ち勝つことが、どうしても出来ないのだった。暫くすると、エスカレートする事を警戒してか、飛行機等は、危険な遊びとして、禁止された。私は、出来ない事は悔しかったが、反面、ホッとした。悔しさと情け無さの為か、その危険な技の名前が浮かんではこない。

## リアカー

---

時々ではあるが、リアカーを見かけた。焼き芋屋さん、屑屋さん、竹竿屋さん等では、日常の運搬手段だった。アサリ屋さん、豆腐屋さんは、黒い自転車だった。リアカーは、人に曳かれたり、自転車で曳かれたりしていた。現在ならばエコと言う事なのだろうが、それしか手段が無かったのだろう。買い物籠を下げての買い物、量り売りの味噌、新聞紙で作られた紙袋、生活全体が、エコと言えればエコだったのだ。段々と、昔の生活に戻り出しているのは、どこことなく面白いが、違和感も禁じる事が、出来ない。

私の家の二軒隣は、自転車屋さんだった。そこでは、リアカーのタイヤのリムを組んでいた。リムのネジを調節して、左右の差を取って行くのだが、この作業を見るのが、面白かった。ネジの占め具合を調整しては、リムを手で回し、リムの左右にあるガイドにあたらないかのを何度も確認する。微妙な調整を繰り返し、リムは段々と真円になって行く。職人の過程で育っている私には、そんな光景が、興味深かったのだろう。

父からは、小さな頃から、物を見て覚える事を教育されていた様に思う。「門前の小僧習わぬ経読む。」そんな教育が、繰り返されていた。単に教わるのではなく、目で見て出来る様になる様に教えられた。それが、昔の職人の教育方法だったのだろう。マニュアル化された現代との差を感じるが、そんな覚え方も、時には必要に思える。

見て覚える。それは、単に観察するだけではなく、その後のイメージトレーニングが要だ。手順を覚えた後は、頭の中で、それを実践してみる。その事が重要なのだろう。その教育の賜物か、私には、妄想癖という副産物まで身に付いてしまった。イメージが飛躍しすぎるのだ。頭だけでの作業は、際限が無い。現実とのバランス感覚が必要なのだが、私には、それは機能していない様だ。五十を過ぎた今も、妄想癖は、収まらないでいる。

## 鰹節

---

我が家には、鰹節を削る為の鉋があった。削られた鰹節を受ける引き出しの付いた鰹節削り器ではなく、単なる鉋だったのは、家業のせいだろう。古くなった鉋を鰹節を削る為に流用したのである。鰹節を削るときは、新聞紙の上に、その鉋を刃を上にして置き、鰹節を削るのだ。削れる度に、漂って来るこの香りが好きだ。

私は、物心が付くまで、鰹節は鉋で削る物だとばかり思っていた。世の中に、鰹節を削る道具が有るとは、露程も思わなかった。世の中を知ると言うのは、そんな些細な事なのだと思う。

鰹節を削っていた我が家も、徐々に、削り節を使う様になって行った。鉋の出番も、殆ど無くなっていたのだが、一つだけ例外が有った。オカカのオムズビだけは、鰹節を削っているのだった。やはり、削られた鰹節の方が、一味美味しい様な気がする。

今は、オムズビは、コンビニで済ませてしまう。便利ではあるが、やはり、手で握られた物の方が数段美味しい。私は、おいしいオムズビを求めて、オムズビ屋さんを捜すのだが、なかなか、これと言う店が近所に見つからない。食べなくなったら、直ぐに買いに行けなければ、意味は無い。

食べ物に淡白な妻は、そんな私を不思議そうに見ている様だ。